

I Samuel 7:12-17, 8:1-22, 9:1-21

(Iサムエル記7:12)「そこでサムエルは一つの石を取り、それをミツパとシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、『ここまで【主】が私たちを助けてくださった』と言った。」

“エベン・エゼル”という名前は、「助けの石」という意味です。

「ここまで【主】が私たちを助けてくださった。」

この石は同時に、過去を振り返る、回想の石でもありました。この石は、また現在のための認識の石でした。

そしてこの石は、将来のための啓示の石でした。

「ここまで【主】が私たちを助けてくださった」のです。

過去を振り返って見るのは、私たちにとって習慣的なことです。主がパウロを通してピリピ人たちに言われたことを思い出してください。

(ピリピ1:6)「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」

神さまはあなたをここまで助けてくださいましたか？神さまは今日、あなたを導いてくださっていますか？もしそうなら、あなたも「ここまで【主】が私を助けてくださった」と言うことができます。神さまはここまであなたを助けてくださったのですから、これからも続けて助けてくださいます。

神さまは、私たちが12月にもバラを見ることができるよう、私たちに思い出を与えてくださっています。過去の鍵盤の上で思い出が演奏をするならば、私たちすべては確かに、「ここまで【主】が私たちを助けてくださった」ということができます。ヨシュアはこう言うことができました。

(ヨシュア24:15)「・・・私と私の家とは、【主】に仕える。」

ダビデはこのように言うことができました。

(詩篇107:1-2)「『主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。』【主】に贖われた者はこのように言え。主は彼らを敵の手から贖い、」

私は個人的に、主は何とすばらしいのでしょうか！と言いたいのです。主こそ、私たちを今まで助けてくださり、これからも助けてくださる方なのです。

少し前に、あるビジネスマンがこう言いました。

「あのね、時間の使い方は銀行業務の専門用語にたとえることができるかも知れませんよ。昨日は、支払い済みの小切手、明日は約束小切手。でも、今日はキャッシュなんです。賢く使ってくださいね。」

あなたは自分の人生の中で、神さまを認知していますか。あのエベン・エゼルの石によってサムエルが示そうとしたのは、そのことです。その石は、啓示の石でした。それは、「ここまで(hitherto)」だけでなく、同時に「今後(henceforth)」をも意味したのです。

(詩篇23:1)「【主】は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。」

ある人は以前にこのように言いました。

「私はとても将来に興味を持っている。なぜなら、私はこれからのすべての生涯をそこで過ごすのだから。そして私は、相応にその将来がどのようなものになるのだから、知っておきたい。」

(ローマ8:28)「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

R・A・トーリー博士(Reuben Archer Torrey : 1856年—1928年。アメリカの伝道者、牧師、教育者で著作家。音楽指導者のチャーリー・アレキサンダーとともに、世界中で伝道集會をひらいた。D・L・ムーディ

ーに乞われて、シカゴ伝道協会の聖書学校(Bible Institute of the Chicago Evangelization Society: 現・ムーディー聖書学校)の校長になった。www.wholesomewords.org/biography/biorptorrey.html より)はいつも、ローマ人への手紙8:28を、疲れた心のためのやわらかいクッションと言っていました。私たちすべてには、エベン・エゼルの石が必要です。あなたの人生にも、ひとつ、そのような石があると思います。

(Iサムエル記7:13)「こうしてペリシテ人は征服され、二度とイスラエルの領内に、入って来なかった。サムエルの生きている間、【主】の手がペリシテ人を防いでいた。」

このときから、ペリシテ人たちは二度と、戦いの前のように支配的な強敵にはならなかったとすることができます。この戦いは意義あるものでした。そして、今、その思い出のために、ひとつの石が立っています。この石は、エルサレムから北北西におよそ5から6.5キロメートルの、町が見えるところに立っていました。

(Iサムエル記7:15-17)「サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。彼は毎年、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し、それらの地でイスラエルをさばき、ラマに帰った。そこに自分の家があったからである。彼はそこでイスラエルをさばいた。彼はまた、そこに【主】のために一つの祭壇を築いた。」

これが歴史です。サムエルはイスラエルの預言者であり、士師です。彼は巡回裁判官です。彼はベテル、ギルガル、ミツパを巡回してラマに帰ります。すべてエルサレムの北の地域です。「彼はそこでイスラエルをさばいた」のです。

8章

テーマ: イスラエル神さまを拒否し、王を要求する。

IとIIサムエル記の残りの部分の上にホセア書13:11を重ねて書くことができます。

(ホセア13:11)「わたしは怒ってあなたに王を与えたが、憤ってこれを奪い取る。」

サムエルは偉大な士師であり、神の人でした。彼はエリの息子たちの邪悪さと、神さまがどのように彼らをさばかれたかを見ながら会見の天幕で育てられました。それなのに、サムエルが何をしたか、見てください。

(Iサムエル記8:1)「サムエルは、年老いたとき、息子たちをイスラエルのさばきつかさとした。」

サムエルは、彼らがそれにふさわしくもなく、その能力もなかったのに、自分のあとを継がせるために息子たちを士師にしました。この行動は間違いでした。サムエルは、偉大な士師であり、すばらしい預言者で、偉大な神の人でした。でも、エリがそうであったように、彼は父親としては失敗でした。

(Iサムエル記8:2-3)「長男の名はヨエル、次男の名はアビヤである。彼らはベエル・シェバで、さばきつかさであった。この息子たちは父の道に歩まず、利得を追い求め、わいろを取り、さばきを曲げていた。」

このふたりがサムエルの息子たちでした。彼らは全く不正直でした。不思議だと思いませんか？ 今日、私たちはあまりにも多く、同じことを見ます。多くの牧師たちから同じことを聞きました。

「どうして、教会の敬虔な家族の中に、身持ちの悪い放浪者や麻薬常用者の息子や娘ができるんですかねえ？」多くの場合、説明できません。サムエルは偉大な人、神の人でした。なのに、彼の息子たちが何をしたか、見てください。

(Iサムエル記8:4-5)「そこでイスラエルの長老たちはみな集まり、ラマのサムエルのところに来て、彼に言った。『今や、あなたはお年を召され、あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。』」

イスラエルの人々は、王を望みます。もちろん、彼らは周りの国々の影響を受けています。彼らは、サムエルが年を取ったことと、彼の息子たちの気まぐれな様子を口実としてあげています。

(Iサムエル記8:6-7)「彼らが、『私たちがさばく王を与えてください』と言ったとき、そのことばはサムエルの気に入らなかった。そこでサムエルは【主】に祈った。【主】はサムエルに仰せられた。『この民があなたに言うとおりに、民の声を聞き入れよ。それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから。』」

サムエルが自分の息子たちを士師にしたという事実が、この人々に王を要求する口実を与えます。疑いもなく、このことは、サムエルにとって断腸の思いでした。神さまは、イスラエルが拒否したのは、サムエルではなく、神さまご自身であることを請合って、神さまはサムエルを慰められました。サムエルの息子たちのことは口実であって、神さまの主権を拒否することが本当の理由なのです。

その後、サムエルは王を持つということがどういうことを警告します。サムエルは彼らに、王は彼らを支配し、彼らの息子たちを兵隊として、娘たちを料理人や召使として、そして彼らの畑や、ぶどう畑やオリーブ畑や、動物を自分のために取り上げるだろうと言います。ついには彼らが苦悩のうちに叫ぶだろうが、その日には主は彼らに聞いてくださらないと警告します。

(Iサムエル記8:19-22)「それでもこの民は、サムエルの言うことを聞こうとしなかった。そして言った。『いや。どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。私たちも、ほかのすべての国民のようになり、私たちの王が私たちをさばき、王が私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。』サムエルは、この民の言うことすべてを聞いて、それを【主】の耳に入れた。【主】はサムエルに仰せられた。『彼らの言うことを聞き、彼らにひとりの王を立てよ。』そこで、サムエルはイスラエルの人々に、『おのおの自分の町に帰りなさい』と言った。」

イスラエルの子らは、自分たちの思うようにします。神さまは彼らに王をお与えになります。モーセの時代にイスラエルに関して本当だったことは、今も本当なのです。

(詩篇106:15)「そこで、主は彼らにその願うところを与え、また彼らに病を送ってやせ衰えさせた。」

神さまは王が欲しいというイスラエルの願いをかなえられますが、そのことは彼らの益にはなりません。民への神さまの導きは、預言者を通して間接的なものになります。これから見ていくと分かりますが、神さまは直接王に語ることはなさいません。神さまは、神さまのみことばを王に伝える、預言者を通して語られます。王がそのみことばを受け入れるか拒否するかは、王次第です。

9章、10章

テーマ: サウルが王として選ばれる。サウル、王として油を注がれる。

サウルが王として選ばれる

9章は、Iサムエル記のふたつ目の主要部分の始まりです。最初の部分はサムエルについて書かれていました。今、強調点はサウルに移ります。サウルは、私たちが神さまのみことばの中で出会う、不思議な人物のひとりです。バラムのときのように、サウルを解釈するのも難しいことです。旧・新約聖書の両方の中に、聖書のページに渡って半分暗闇の中を動く、幾人かの不思議な登場人物がいます。彼らは光の中に出てきますが、まるでマーモットのように自分たちの影を見て、また暗闇に戻ってしまいます。

サウルは、最初私たちが出会うときには王ではありません。事実、ことばの本当の意味では、彼は一度も王ではなかったと私は思うのです。

(Iサムエル記9:1)「ベニヤミン人で、その名をキシュという人がいた。——キシュはアビエルの子、順次さかのぼって、ツェロルの子、ベコラテの子、アフィアハの子。アフィアハは裕福なベニヤミン人であった——」キシュはサウルの父で、ベニヤミン族の人でした。創世記のヤコブの12人の息子たちの歴史を思い出せば、ベニヤミン族は、父親であるヤコブのお気に入りの末息子、ベニヤミンから始まりました。ベニヤミンの母親

は、彼が生まれたときに亡くなりましたが、まさに息絶えようとするとき、彼をベンオニ、つまり「私の悲しみの子」と名づけました。でも、ヤコブがこの子を見たとき、彼は言いました。

「いや。この子は私の右手の子となるのだ。」

そして彼をベニヤミンと名づけました。少年はお気に入りの息子で、兄たちに守られました。そして士師記の中で、この部族内で起こったとんでもない罪のために人口が激減しました。このベニヤミン部族から、最初の王が出ます。

(Iサムエル記9:2)「キシュにはひとりの息子がいて、その名をサウルと言った。彼は美しい若い男で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。」

この若者、サウルはハンサムでした。肉体的には、王のように見えてましたが、彼は自分の役柄を演じる役者に過ぎませんでした。彼の心は王ではありませんでした。ところが民は、自分たちの王をその人の人格ではなく、外見に従って選んでいます。

この、「外見」を強調することが、今日私たちの国をこんな危険な状況に置いているのです。私たちの最も危険な敵はテレビです。この国を最終的に支配するのは、テレビ映りの良い人物です。なぜでしょう？なぜなら、私たちは人を彼らの人格によるのではなく、彼らの見かけやしやべり方によって選ぶからです。私は、テレビの代わりに、人の本当の人格を映し出すレントゲンがあったら良いのにとします！

イスラエルの子らは王を欲しがっていました。彼らはサウルが気に入りました。彼はハンサムでした。長身でした。見掛けが立派でした。国中を捜しても、彼よりも王らしく見える人物はいませんでした。彼はテレビと映画のスターになれたことでしょう。彼は役柄を上手に演じることができました。問題は、彼の心が王ではなかったことでした。

(Iサムエル記9:3)「あるとき、サウルの父キシュの雌ろばがいなくなった。そこでキシュは、息子サウルに言った。『若い者をひとり連れて、雌ろばを捜しに行ってくれ。』」

私は主がユーモアのセンスがある方だということを知っています。神さまのみことばのあちこちに出てきますから、神さまのユーモアを見逃すことはできません。サウルは父親の雌ろばを捜しています。そしてイスラエルのばか者たち(訳注:「雌ロバ(複数)」も、「ばか者たち」も、英語では asses)は王を捜していました。彼らは結びつくべくして結びついたのです。このようなことが起こると、主は微笑んでおられるに違いありません。人間の種族に関する、何という解説でしょう！

(Iサムエル記9:5)「彼らがツツの地に来たとき、サウルは連れの若い者に言った。『さあ、もう帰ろう。父が雌ろばのことはさておき、私たちのことを心配するといけなから。』」

サウルと彼のしもべは、父の動物たちを捜して回りましたが、見つけることができませんでした。ついにサウルは言いました。

「家に帰ろう。ボクたちも迷子になってしまうよ。そうしたら、今度はボクたちを捜すための捜索隊を出さないといけなくなるから。」

(Iサムエル記9:6-8)「すると、彼は言った。『待ってください。この町には神の人がいます。この人は敬われている人です。この人の言うことはみな、必ず実現します。今そこへまいりましょう。たぶん、私たちの行くべき道を教えてくれるでしょう。』サウルは若い者に言った。『もし行くとすると、その人に何を持って行こうか。私たちの袋には、パンもなくなったし、その神の人に持って行く贈り物もない。何かあるか。』その若い者はまたサウルに答えて言った。『ご覧ください。私の手に四分の一シェケルの銀があります。私がこれを神の人に差し上げて、私たちの行く道を教えてもらいましょう。』」

ここに、神さまの御霊による解説が挿入されています。これは理解する助けになります。

(Iサムエル記9:9)「—昔イスラエルでは、神のみこころを求めに行く人は、『さあ、予見者のところへ行こう』と言った。今の預言者は、昔は予見者と呼ばれていたからである—」

名前が変わります。降神術や交霊術をする人々は「予見者」と呼ばれていました。神さまは、ご自分のために働く者を別の名前で呼びたいと思われたので、その人は「預言者」と呼ばれます。これは実は預言者という集団の最初の人物、サムエルでした。モーセも預言者と呼ばれていますが、サムエルが、預言者集団の最初の人物なのです。もちろん、サウルと彼のしもべが話しているのは、サムエルのことです。

(Iサムエル記9:14)「彼らが町へ上って行って、町にさしかかったとき、ちょうどサムエルは、高き所に上ろうとして彼らに向かって出て来た。」

サムエルは道の途中でサウルたちに出会います。

(Iサムエル記9:15)「【主】は、サウルが来る前の日に、サムエルの耳を開いて仰せられた。」

「旧約聖書の中で、『主が語られた』と言われているとき、神さまは、どのようにしてコミュニケーションされたのですか？」という質問がよく出されます。私は、主が語られたといわれているところでは、主が語られたのだと思います。そのようにしてコミュニケーションがとられるのです。ことばによって、です。聖書のことば(words)が靈感されているのであって、思想(thoughts)が靈感されているではありません。

「【主】は、…サムエルの耳を開いて仰せられた」

と書かれているとき、神さまがどのようにコミュニケーションをされたかを垣間見ることができます。私が耳で聞くものは、“ことば”です。もちろん、それだけが意味をなすものであり、サムエルが聞いたのも、ことばです。

(Iサムエル記9:16)「『あすの今ごろ、わたしはひとりの人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。あなたは彼に油をそそいで、わたしの民イスラエルの君主とせよ。彼はわたしの民をペリシテ人の手から救うであろう。民の叫びがわたしに届いたので、わたしは自分の民を見たからだ。』」

多くの場合、神さまは私たちにとって最善ではない願いに答えられます。欲しいものが何であれ、私たちが主に向かって叫び続けるとき、主はイスラエルになさったのと同じことをわたしたちにもなさいます。願いをかなえられるのです。イスラエルの子らが荒野にいたとき、彼らは肉が食べたいと叫びました。神さまは彼らに肉を与えられましたが、「彼らのたましいを衰えさせ」られました。だからこそ、祈りはキリストの御名によって祈らなければならないのです。つまり、祈りは主のみこころと主のご栄光によらなければならないという意味です。すべての願いは、そのとても大切なことがらによって決まらなければならないのです。

(Iサムエル9:17)「サムエルがサウルを見たとき、【主】は彼に告げられた。『ここに、わたしがあなたに話した者がいる。この者がわたしの民を支配するのだ。』」

神さまは彼らの願いを聞き入れられ、彼らに王を与えられました。サウルは、サムエルにさえもよい印象を与えました。サムエルは彼を高く評価していて、彼が成功しなかったという事実を残念に思ったことが分かります。

(Iサムエル記9:18-20)「サウルは、門の中でサムエルに近づいたとき、言った。『予見者の家はどこですか。教えてください。』サムエルはサウルに答えて言った。『私がその予見者です。この先のあの高き所に上りなさい。きょう、あなたがたは私といっしょに食事をする事になっています。あしたの朝、私があなたをお送りしましょう。あなたの心にあることを全部、明かしましょう。三日前にいなくなったあなたの雌ろばについては、もう気にかけないように。あれは見つかっています。イスラエルのすべてが望んでいるものは、だれのものでしょう。それはあなたのもの、あなたの父の全家のものではありませんか。』」

サウルは実際、神さまの選んだ者ではありませんでした。つまり、彼らが欲しがるような人物を知っておられて、神さまはイスラエルにそのような人物を与えられたのです。サウルが人々の間を動き回ると、人々は彼が長身で、ハンサムで、王のように見えることを知りました。彼らが王を求めたとき、神さまは彼らの願いをかなえられました。

(Iサムエル記9:21)「サウルは答えて言った。『私はイスラエルの部族のうちの最も小さいベニヤミン人ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、つまらないものではありませんか。どうしてあなたはこのようなことを私に言われるのですか。』」

この節では、サウルはまるでギデオンのように聞こえます。とても謙虚に聞こえますね。ギデオンは言いました。

（士師記6:15）「…『ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができますでしょう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。』」

ギデオンは、「私よりも小さい者はだれもいません」と言っていたのです。ギデオンは本当のことを言っています。彼は臆病者で、死ぬほど怖がっていました。イスラエルは戦いのさなかにあり、敵の数はうんと多かったのです。

サウルは何も怖がる理由はありませんでした。イスラエルは戦いの中にはありませんでした。彼は、もうすでに見つけていた父親の耳の長いロバを捜し回っていました。彼の使命は終わりました。彼がしたようなスピーチを促すものは何もなかったのです。私は個人的には、彼の謙遜さは偽物だったのではないかと感じます。サウルは、自分はなかなか王にふさわしいと感じていたのではないかと思います。